ソーシャルワークの価値・理論に根ざした面接技法の体系化

－自己実現概念の理解を軸にして－

○　関西福祉科学大学　　安井　理夫（4944）

キーワード：互恵関係、自己実現、分かち合われた関係性

１．研 究 目 的

たとえば、行動アプローチなどの特定のアプローチが、ソーシャルワークのアプローチとしてどのようにふさわしいのかを説明した研究（たとえば津田耕一 2003 年など）は存在している。しかし、教科書などでよく取りあげられる面接技法（たとえば内容や感情の反射、情緒的な支持など）が、なぜソーシャルワークの技法として適切なのか、そしてそれらはソーシャルワークの価値や理論とどう関連しているのか、を体系的に説明したものは発表者が渉猟した範囲ではみつからなかった。そのような現状によって、これらはコミュニケーションやよい人間関係を築くための方法の延長として、換言すれば、価値や理論とは直接には関係のない基本的な態度としてしか扱われなくなっているのではないだろうか。そこで本研究では、理論にもとづき、価値を実現するために、これらの技法がどう役立つのかを体系的に説明する試みを通して、この仮説を確かめてみたい。

２．研究の視点および方法

ブトゥリム（Butrym, Z. T.）が示したソーシャルワークの価値前提（人間尊重、人間の社会性、成長への信頼）、IFSW の定義であげられているソーシャルワークの価値（人権、社会正義）、ジャーメイン（Germain, C. B.）がライフモデルで示した生活理解の 3 つの側面（人間関係、ライフステージの変遷、社会の圧力）、太田義弘が述べるソーシャルワークの目標（自己実現、社会的自律性）の 4 つを足がかりとして、それぞれの概念が有機的に関係し合うような概念図を作成する。そして、この図をもとにして、つぎの 2 点について考察する。

(a) これらの概念に通底しているアイデアの解明

(b) それぞれの概念を有機的に関連づけるためには、自己実現の理解が鍵になること

つぎに、ここでの成果をふまえて、ソーシャルワークの面接技法が、これらの概念の実現にどのように寄与しているのかを明らかにする。そうすることで、心理臨床とのちがいを説明できるし、そこからソーシャルワークとはどのような支援なのかを説明することも可能になると考えられる。

さらに、ソーシャルワークにおける技法理解が、いまだに病理モデルから完全には脱却できていない理由を明らかにし、そこからの克服の方法を技法の理解や活用方法という立場から提案したい。

３．倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守して行っている。

４．研 究 結 果

人権や社会正義の基盤である人間の尊厳とは、個人が主体として尊重されることであると考えられる。このことをふまえて、まず社会的自律性に着目すれば、「それぞれに異なった人格として尊重し合う」ことができるような人間関係や社会のしくみをどのように構想していくのかが課題になる。つぎに「おなじ人間として尊重し合う」という点に目を向ければ、公平や公正を目指す社会正義やエンパワメントにつながっていく。こうしてみると、すべてに通底しているのは「私も OK、あなたも OK」（Harris, T. A. 1973 年）というアイデアであると考えることができる。しかし、自己実現を個人の内側に見出そうとする立場では、このループが全体として有機的につながっていかないことも明らかになった。

５．考 察

ソーシャルワークにおいて「自己実現」は、マズロー（Maslow, A. H. 1954 年）の欲求の５段階説を取りあげて説明されることが多い（たとえば日本社会福祉士養成校協会 2005 年など）が、これはきわめて理想的な条件がいくつも整ったときのはなしであり、またソーシャルワークが人と環境の交互作用をその発想の起点とするのであれば、自分ひとりが「こうありたい」と思っていても、それが他者と分かち合えないものであれば、無理強いになってしまう。したがって、自分を分かち合い、相手を分かち合おうとする関係のなかに、おたがいの自分らしさは生まれてくる（合意されてくる）と考えるべきだろう。つまり、自己実現や自分らしさは、誰かと分かちあうものなのである。これは、エリクソン（Erikson, E. H.）のアイデンティティの考えとも一致している。

また、ソーシャルワークの技法はソーシャルワーカーが利用者を理解したり援助するためのものであるというよりは、ワーカーの提供することばや情報は、利用者によって自己や自分の生活を理解したり解決の方法を模索したりするために活用されるという立場から提供されるべきである。したがって、インテーク→アセスメント→プランニングという援助プロセスは援助者の側からみたもの（病理モデル）であり、利用者が支援関係のなかで体験しているプロセスとは異質のものであると考えられる。ソーシャルワーカーの技法は、支援関係において「私も OK、あなたも OK」という関係を実現し、利用者がまわりの人間関係を含む生活環境や社会とそのような関係を構築することができるように支援するためのツール（道具・手段）として理解されるべきだろう。心理臨床で活用されるものとツール（技法）そのものはおなじであっても、ソーシャルワークの焦点はこのような「関係」にあり、それは、価値や理論と矛盾なくつながったものであると考えられる。